# 帝政期ローマにおける「皇帝礼拝」
## ―「皇帝礼拝」概念の再検討―

大　河　歩菜美

［**キーワード**：①ローマ史　②皇帝礼拝　③アウグストゥス　④神格化］

※本稿は、2020 年 1 月提出の修士論文「『ローマ皇帝礼拝』概念の学術的有効性について」に基づいている。

※ 本稿では、以下の略語を用いる。

*CIL.*＝*Corpus Inscriptiones Latinarum consilio et auctoritate Academiae litterarum reginae Brrussicae edictum*, Berlin, 1863−.

*ILS.* ＝*Inscriptines Latinae Selectae*, Dessau, H.（Hrsg.）, Berlin, 1892−1916.

*AE*＝*L'Année épigraphique*, Paris, 1888−.

### 1. はじめに

歴史上の多くの国家において、絶対視または神聖視された絶対君主や支配者のために、様々な式典が執り行われ、時には彼らに対して宗教的儀礼が捧げられることもあった。帝政期ローマにおいてもその現象は認められ、皇帝に対して宗教的儀礼が捧げられたことが知られている。これらの現象

は一般に「皇帝礼拝」と呼ばれ、様々な形態の礼拝が存在していたことが知られている。

さて、これまでのローマ史研究の中で、この「皇帝礼拝」という言葉はほとんど特別のことわりなしに用いられてきた。これは、英語で言えば “Emperor Worship” または “Imperial Cult”、ドイツ語で言えば “Kaiserkult” といったヨーロッパで古くから用いられてきた用語の直訳であり、皇帝に対して宗教的儀礼が捧げられた帝国内のあらゆる事例に対して用いられている。「皇帝礼拝」概念が主に提起されるようになったのは、今や否定されつつある見解ではあるが、キリスト教徒迫害史における、キリスト教徒迫害が「皇帝礼拝」拒否の故であったとする理解によってであると考えられる。ここで注目したいのは「皇帝礼拝」という言葉が政治的法規定として確立されている、皇帝を宗教的に権威付ける政策として単一的に用いられていることであって、その拒否が即キリスト教徒迫害に繋がったと研究者たちは論じてきたのである[1)]。こうして、「皇帝礼拝」は多くの場合、漠然と皇帝への宗教的儀礼というような意味で使われているのが現状で、学術的な定義を認識した上で明確な内容をもつ概念として用いられることはない。しかしながら、この概念については、例えば E. Bickerman が “the imperial worship” が存在したのではなく、極めて多様な礼拝の数々が存在したのであって、それを現代の学者が便宜上 “the worship of emperors” と呼んでいるだけなのだ[2)]、などと指摘しているように、本稿でもまた実際の帝国内における皇帝への礼拝創設の過程及び内容を単一的に「皇帝礼拝」と呼ぶほど簡単ではないと考える。つまり、「皇帝礼拝」といっても地方やレベルが異なるに応じて実に多種多様な形態をとったのであって、単一の普遍的制度がいつから始まったというものではない。このため、そのような「皇帝礼拝」が帝国の政治や宗教政策に与える影響も単純に論じることは出来ないと考える。これより、研究対象領域や分析視点を示す名

称として、あるいは専門用語として提起され広く用いられるようになった「皇帝礼拝」は学術的概念としては問題を孕むものであると考える。

そのため、本稿では「皇帝礼拝」概念について再検討することを目的とする。ローマにおける皇帝神化の起源とその成立について第 2 節で述べ、第 3 節でイタリア地方都市における存命中の初代皇帝アウグストゥスに対する礼拝や死後に神格化された皇帝（神なるアウグストゥス）に対する礼拝といった実際に異なるレベルの「皇帝礼拝」を取り上げる。先行研究の他、碑文史料や文献史料を用いながら、それぞれの起源や様相を検討することで帝政期ローマにおける「皇帝礼拝」の多様性を論じることとし、最終的にその時果たして「皇帝礼拝」概念は有効であるのかということを再検討してみたい。

## 2. 皇帝神化の起源とその成立

ローマにおける皇帝神化を考える際、まず問題とされるのがその起源であるが、一般的に皇帝の生前神化と死後神化はいずれもギリシア・ヘレニズム世界の影響と考えられている。そして、その中でも晩年に神格化され、後の皇帝たちの神格化に大きな影響を与えることとなるユリウス・カエサルは、特にマケドニアのアレクサンドリア大王より始まるヘレニズム諸王国の君主礼拝の影響を受けていたとされている[3)]。古代ギリシアの都市ではオリンポスをはじめとする「不滅の神々」と並んで、多くの人間として生まれた「英雄（半神）（heros）」や都市のために大きな功績をあげた「恩恵者（euergetes）」たちが死後に宗教的礼拝を受ける慣習が存在していたが、ペロポネソス戦争末期から前 4 世紀の間には、死後ではなく生前に宗教的儀礼を捧げられる人物が知られるようになり、後にアレクサンドロス大王とその後継者たちの間で君主礼拝の形が展開されていくこととなった[4)]。こうして地中海世界には古くから英雄（半神）や君主を崇拝する習

慣が存在していたのである。

さて、共和政ローマではギリシア・ヘレニズム世界で見られたような英雄（半神）崇拝や個人の神格化は生前・死後の神格化を問わず、元来存在していなかったとされ、前 2 世紀に至るまで重要人物個人をローマで礼拝するといった事例に対しては確実な証拠は 1 つもない [5)]。そのため、ローマでの個人への礼拝は、カエサルの晩年から暗殺直後に大きく変容、そして促進された。それは、アシアやキリキアに軍務で数年間過ごし、プトレマイオス朝の女王クレオパトラとも関係を持っていたことで影響を受けたカエサルが君主礼拝を伴うヘレニズム的な王政をローマで目指したことに因るものであった [6)]。

カエサルは前 46 年のタプソスの戦い、前 45 年のムンダの戦いで敵対勢力であったポンペイウス派の残党を破り、勝利した。これらの勝利によりカエサルは事実上のローマの単独支配者となり、彼に対してローマの元老院と民会は数多くの宗教的栄誉を含む栄誉を次々に与えることとなった [7)]。そしてカエサル生前の前 44 年初頭には、公費によるカエサルの誕生日の犠牲祭、諸都市及びローマの諸神殿へのカエサル像の奉納、カエサルのゲニウス（守護神）（Genius Caesaris）への誓約などが定められる他、カエサルが「ユピテル・ユリウス（Juppitel Julius）」と呼びかけられた [8)]。このことからは、生前に既にカエサルは自らが神格化されて礼拝を受けることを認め、さらには彼自身がそれを望んでいたことが考えられる。そして前 44 年 3 月 15 日のカエサル暗殺後には、3 月 16 日に元老院が、大赦やカエサル生前の決定の遵守と並んで、カエサルを神として崇めることを決議した [9)]。さらに同年 10 月のキケロの演説では「神なるユリウス（Divus Julius）」のために、神の座椅子や神殿と並んで、古代ローマの三主神（ユピテル、マルス、クィリヌス）と同等の神官が存在し、マルクス・アントニウスが任命されたことが述べられている [10)]。こうして、カエサルを通じ

て大きく促進された礼拝は、彼の暗殺後、後継者となったカエサルの養子オクタウィアヌス（アウグストゥス）によってさらに成立されていくこととなる。

さて、オクタウィアヌスはカエサルの相続人としての地位と権利を必要とし、そのための活動を行うこととなる。前 42 年 1 月 1 日頃、オクタウィアヌスの手によりカエサルの神格化は、元老院決議で確認されることになり神殿の建設が決定された[11)]。こうして、カエサルは新たな国家神として受け入れられ、カエサルの神格化が法的な手続きを通して実現した。この一連のカエサルへの決議は後の皇帝たちの神格化の部分的なモデルとなった。また、オクタウィアヌスは自らを「神の息子（divi filius）」と称してカエサルとの親子関係を強調し、カエサルを自らの地位と権利の正当化のために利用することで自らの権力を誇示したのである。

そして、オクタウィアヌスは前 31 年のアクティウムの海戦の勝利、前 30 年にはアレクサンドリアを陥落させて政敵アントニウスとクレオパトラに勝利すると、ローマと地中海の単独支配者となる。これより彼はその支配者としての地位を固めるために、カエサルと同様に宗教的な権威が必要となったが、オクタウィアヌスは共和政懐古主義者への配慮の他、カエサル暗殺の過去により、少なくともローマ市では自らに対する直接的な礼拝の創設を避けていたと考えられる。

まず、前 30 年には元老院によって、オクタウィアヌスの東方の勝利を祝い、彼のために祈りを捧げること、そして公私両方の祝宴で彼のゲニウスに対して献酒をすることが定められた[12)]。なお、ゲニウス（genius）とは、本来男性の生殖能力を形象化したものであり、ローマ市民の家父長の守護神を意味するようになっていたもので、「アウグストゥスのゲニウス（Genius Augusti）」とは絶対的支配者である皇帝の地位を国家の父に例えた本来のゲニウス信仰の改変されたものであり、その礼拝は皇帝家の繁栄

のためになされた[13]。さて、前 27 年 1 月 16 日に、元老院から「アウグストゥス（Augustus）」の名が与えられ、その後の前 12 年にレピドゥスの後を継いで大神祇官長（pontifex maximus）に就任すると、アウグストゥスのゲニウス礼拝が公式の儀式に導入された。大神祇官長はフォロ・ロマーノの公邸に住むのが習慣であったが、アウグストゥスはこれを拒否し、パラティーノの自らの家の一部を公有地にすることによって、自らの私的な家の礼拝をローマの公式の儀式にしたのであった[14]。さらに、遅くても前 7 年までに行われたローマ市の行政区画の改変の際に、アウグストゥスは各街区に祠と祭壇を設け、自らの家の神である 2 柱のアウグストゥスのラレス（Lares Augusti）と共にアウグストゥスのゲニウスを祀った[15]。

前 14 年 8 月 19 日にアウグストゥスがノラで亡くなると、彼の死後神化（consecratio）は達成される。彼の遺体はローマに運ばれ、マルスの野で荼毘に付された。彼の神格化は、アウグストゥスが天に昇ったのを見たとの元老院議員 Numerius Atticus の証言に基づいたものであった。元老院が 9 月 17 日にアウグストゥスの神格化を会議で決定すると、神殿の建立と神官（flamen Augustalis）の選出、アウグストゥス祭祀団（sodales Augustalis）の創設が定められ、この他にもアウグスターリア祭（Augustalia）が設けられた[16]。こうして、「神なるアウグストゥス（Divus Augustus）」となったアウグストゥスの死後神化は範例となり、彼以後の皇帝たちもこの手順に従って神格化されることになった。そして、以上のことからローマ市における皇帝神化の枠組みはほぼ完成したのであった。

## 3. イタリア地方都市における初代皇帝アウグストゥスに対する礼拝

### 3-1. 存命中のアウグストゥスに対する礼拝

まずは、イタリア地方都市における存命中の初代皇帝アウグストゥスに対する礼拝について取り上げていきたい。L. R. Taylor によれば、アウグ

ストゥスの、自らへの宗教的儀礼に対する態度は、Cassius Dio によって最もよく説明されているという。彼の記述によると、前 30 年から前 29 年に、小アシアの属州アシアとビテュニアにおいて、新たな礼拝が創設された。属州諸市の有力者たちの集まるコイノン（koinon）の会議において、エフェソスとニカイアの両市に「女神ローマと神なるユリウス」のために神殿が建てられることが認められ、両属州に住むローマ市民にはこれを崇拝することが命じられたが、同時にギリシア人たちには、オクタウィアヌスのために神殿を建てることも許可された[17]。というのも、東部属州のギリシア人都市で、オクタウィアヌスは、アクティウムの海戦の勝利の直後からヘレニズム時代以来の伝統に基づいて「恩恵者」「救済者」礼拝の対象となり、ローマの宗教的伝統やカエサル暗殺の影響は顧慮されず、より直接的な皇帝礼拝が望まれていた。しかしながら、オクタウィアヌスは、ローマ市民に対しては自らへの単独直接神化を避ける狙いでもって、東部属州の伝統を顧慮せず、「女神ローマ（dea Roma: ギリシア語では Thea Rome）」と呼ばれた、ローマ市を表す新しい神格との合祀という形での礼拝を許可したのである[18]。

このことから従来のイタリア地方都市での「皇帝礼拝」に関する学説では、ローマ市やローマ市民の居住するイタリア地方都市において、存命中の皇帝に対する直接的な礼拝は避けられ、皇帝たちは死後に神格化されて礼拝を受ける他、そのゲニウスやヌーメン（神性 : Numen）などを介して間接的に礼拝を受けていたとされてきた。ところが、ローマ市以外の諸都市では、アウグストゥスの生前から彼のために捧げられた神官・祭壇や祭司・神官職が存在していたことが碑文史料などから知られている。これらに関して、Taylor はアウグストゥスを神とした礼拝を行っていたのではなく、実際は彼のゲニウスが礼拝対象であったと主張し、この説は定説として今日まで約 100 年もの間受け入れられている[19]。しかしながら、近年、

I. Gradel がこの説に異論を述べ、新たな主張を打ち出しているのだ。彼は史料を文字通りに解釈して、アウグストゥスの生前における帝国内全ての都市のアウグストゥスに対する宗教的儀礼は彼を既に神同然に扱うものであったと主張しているのである[20)]。

そのため、この項では以上のようなイタリア地方都市での「皇帝礼拝」研究の状況を受け、特にアウグストゥスのゲニウスとヌーメン礼拝を再検討していくことで、存命中の初代皇帝アウグストゥスに対する礼拝の諸相について論じていくことにしたい。

### 3-1-1. アウグストゥスに対する直接的な礼拝

さて、以下のようなイタリア地方都市におけるアウグストゥスのゲニウスとヌーメン礼拝の再検討の結果、当該地域におけるアウグストゥスのゲニウスとヌーメンを介する礼拝は確かに存在していたが、それと同時に存命中のアウグストゥス自身に直接的に捧げられた礼拝も確かに存在していたことが結論付けられる。まず、【表 1】の初代皇帝アウグストゥスの生前から彼のために捧げられた神殿や祭司・神官職の存在からは、当該地域においてアウグストゥスを神同然に扱う風習が広がっていたと解することが可能である[21)]。

**【表 1】**

| 地名 | 史料名 | 内容 |
|---|---|---|
| ネアポリス | Cass. Dio, 55, 10, 9 | アウグストゥスのために競技を開催したとの記述 |
| プテオリ | Suetonius, *Aug*, 93 | アレクサンドリアの船員たちがアウグストゥス自身に香を捧げたとの記述 |
| プテオリ | *CIL*. X, 1613 | L. Calpurnius が自費でアウグストゥスのための神殿を建設 |

| | | |
|---|---|---|
| ポンペイ | *CIL*. X, 830（＝*ILS*. 6361b）<br>*CIL*. X, 837（＝*ILS*. 6361）<br>*CIL*. X, 838（＝*ILS*. 6361a）<br>*CIL*. X, 947 | M. Holconius Rufus がアウグストゥスの祭司・神官職（flamen Augusti, Augusti sacerdos, Augusti Caesaris sacerdos, flamen Caesaris Augusti）を保持 |
| ポンペイ | *CIL*. X, 840（＝*ILS*. 6362） | M. Holconius Celer がアウグストゥスの祭司職（Augusti sacerdos）を保持 |
| ペルシア | *CIL*. XI, 1923（＝*ILS*. 6614） | アウグストゥスのために神域を奉献 |
| ピーサエ | *CIL*. XI, 1420（＝*ILS*. 139） | アウグストゥスを祀る神殿（Augusteum）の存在 |
| ピーサエ | *CIL*. XI, 1421（＝*ILS*. 140） | T. Statulenus Iuncus がアウグスターレスの神官職（flamen Augustales）を保持 |

はじめに、カンパニア地方の都市ネアポリスでは、Cassius Dio の記述から復讐神マルス（Mars Ultor）の神殿を捧げた 8 月初頭に、アウグストゥスのために競技が開催されたこと、そしてこの競技のためにアウグストゥスの神殿が存在していたことが明らかとなる。この競技はオリンピアの競技とアシアにおける属州の祝祭を手本としていて、ネアポリスでは東方でのアウグストゥスの礼拝と非常に類似した礼拝が見られていた。この地の礼拝に関しては Cassius Dio 自らがギリシアの慣習に基づいていると述べている他、ネアポリスが前 6 世紀に建設されたギリシア植民市であり言語や政体などの点においてギリシア的な性質を保持していたことから、アウグストゥス自身に捧げられていたものであったと考えられる[22]。

また、同じカンパニア都市であり、ネアポリスの近隣に位置していたギリシア植民市プテオリにおいてもアウグストゥス自身への神殿の建設の可能性が指摘できる。理由としては、神殿を建設した L. Calpurnius がアレクサンドリアとアシアとシリアで商業を営んでいた商人たちによって顕彰され[23]、オリエントの市場で支配的な影響力を保持していた裕福な商人で

あったと考えられている点が挙げられる[24]。すなわち彼をはじめとする商人たちによって営まれていた東方貿易によって、東方の「皇帝礼拝」の慣習がもたされたと考えられる。このことは、Suetonius の、アレクサンドリアの船員たちがアウグストゥス自身のためにプテオリで香を捧げたとの記述からも示すことができ、この記述からは東方の「皇帝礼拝」の影響がプテオリで受けられる状態にあったことがさらに明確にできるのである。また、プテオリに対しての礼拝の影響はネアポリスからある可能性も忘れてはならない。

さらに、存命中のアウグストゥス自身に対しての直接的な礼拝がもたされたと考えられる都市としては同じカンパニア都市ポンペイも挙げられる。イタリア地方都市では 100 人を超える「皇帝礼拝」の祭司・神官職の存在が碑文史料より知られているが、その中で時期的に最も早いのが前 2 年に刻まれたとされるポンペイの M. Holconius Rufus の碑文である。彼は、アウグストゥス時代にもっとも繁栄したとされる有力家門のホルコニウス一門に属し、アウグストゥスの祭司・神官職を務めていたことが知られている。

また、ホルコニウス一門からは Rufus の息子であるとされている M. Holconius Celer もアウグストゥスの祭司職を保持していたことが碑文史料より知られている[25]。Rufus がアウグストゥス自身より前に亡くなったために一貫して「アウグストゥス・カエサルの祭司」などと称されていたことに対し、Celer は「アウグストゥスの祭司」と「神なるアウグストゥスの祭司（divi Augusti sacerdos）」と称されている。彼はアウグストゥスの存命中にアウグストゥスの祭司に就任し、後 14 年のアウグストゥスの死、または 9 月 17 日にアウグストゥスが神格化され Divus となった後も、神なるアウグストゥスの祭司と変更し、その祭司職を保持していた[26]。

本稿では、これらの碑文史料に現れるアウグストゥスの祭司職は全て存命中の皇帝自身に捧げられたものであると考える。理由としては、Gradel

の主張するように、これらの碑文の中で、「アウグストゥスのゲニウス」が言及されている、もしくは称号の中に「ゲニウス」という言葉が現れているものは 1 つもないことが挙げられる。さらに、ポンペイでは、アウグストゥス時代以降においても、D. Lucretius Satrius Valens が、ネロがクラウディウスの養子となった後 50 年から、クラウディウスが亡くなり即位した後 54 年までの間に「皇帝の息子ネロ・カエサルの終身神官（flamen Neronis Caesaris Augusti filii perpetuus）」の職を保持していた他[27]、Gn. Alleius Nigidius Maius がウェスパシアヌス時代に「アウグストゥス・カエサルの神官（flamen Caesaris Augusti）」の職を保持していたことが碑文史料から明らかになっている[28]。この 2 つの碑文に現れる祭司職の名称に注目してみても「ゲニウス」という言葉が現れている例はないことが分かる。

また、M. Holconius Celer がアウグストゥスの祭司職を更新しているという事実にも注目したい。祭司職がアウグストゥスの死後にわざわざ更新されていることから見ても、彼の生前に就いていたアウグストゥスの祭司は存命中の皇帝に捧げられていたものであったに違いない。ポンペイにおいて、これらの「皇帝礼拝」の祭司・神官職は全て存命中の皇帝自身に捧げられていたものであった[29]。そして、このような直接的な礼拝に関しては、プテオリの礼拝の際に取り上げた東方からの影響、さらには近隣都市ネアポリスの影響が同様にポンペイにもたされたものだと考えられるのである。ポンペイでもまたブドウ酒などを東方へ輸出していた。そして、何よりもホルコニウス一門はブドウ栽培を経済的基盤としていたことが知られている。このことからポンペイにおいても東方貿易によって礼拝の慣習がもたらされた可能性が考えられるのである。

さて、ポンペイの「皇帝礼拝」は東部属州の影響や近隣都市の影響により、皇帝に対して直接的に捧げられていたと考えられる訳だが、さらにポンペイではそのことに加えて、このような礼拝をアウグストゥス時代に皇

帝（アウグストゥス）が知り黙認していた可能性があったと考えられることも示していきたい。それは、M. Holconius Rufus が保持していた地方都市推薦の参謀将校（tribunus militum a populo）や植民市の保護者（patronus coloniae）から検討することが可能である。

まず、彼が保持していた地方都市推薦の参謀将校は、アウグストゥス時代の地方都市にのみ確認される職である。この職は、地方都市の推薦によって、アウグストゥスが都市の有力者を任命する職務であり[30]、また Suetonius が「アウグストゥスは、どこでも名誉ある人々の供給がなくならないように、〔中略〕各町によって推薦された人々を騎士級軍職に任命した〔後略〕」[31] と伝える軍職のことであった。この職がアウグストゥスによって任命されていたことに注目すると、アウグストゥスの祭司職を保持していた Rufus が直接的にアウグストゥスと何らかの繋がりを持っていたと考えることが出来るのではないだろうか。直接的な繋がりでなくとも、このことから少なくとも間接的にアウグストゥスと繋がりがあったことは確かであろう。また、「植民市の保護者」の称号からもまたローマとの繋がりを少なからず見出すことができ[32]、こうしてアウグストゥスがポンペイにおける自らに対する直接的な礼拝を知り、黙認していた可能性が考えられるのである。

また、これらカンパニア都市における礼拝の他、ペルシアで奉献された神域に関しては碑文内の「再建されたペルシアで *Persia restituta*」の文字から、前 41 年から前 40 年の内乱（ペルシアの戦い）で破壊され混乱状態にあった都市を再建し大きな恩恵を施した「都市の創設者（conditor urbis）」としてのアウグストゥス個人に捧げられた可能性が考えられる[33]。内乱の際にはペルシアの破壊者であったアウグストゥスが、都市の創設者として礼拝を受けるのは奇妙であるように思われるが、この礼拝の担い手がもし内乱後にペルシアにやってきた入植者たちであったとしたら、反感

などなしに礼拝されることが可能であったのではないかと考える[34)]。しかし、このような「創設者（conditor）」としての礼拝の形式はギリシア人都市において見られるものであり、ローマでのアウグストゥス時代におけるこのような礼拝は例がない。また、ペルシアは内陸に位置しているために交易などによってこのような礼拝がもたらされたとする可能性も指摘できないだろう。しかし、碑文の中で「ゲニウス」が言及されていないことはやはり注目に値し、このことはピーサエのアウグストゥスの神殿や神官職にも当てはまる。ペルシアやピーサエにおいては、このような、凡そ東方からもたらされたと考えられイタリア地方都市においては新規の神として礼拝されることとなったアウグストゥス自身に対する礼拝の形式を選択することで、アウグストゥス個人に忠誠を示していたと解する他ないのである。

### 3-1-2. アウグストゥスに対する間接的な礼拝

次に、【表 2】の事例からはイタリア地方都市においてアウグストゥスのゲニウスやヌーメンなどを介した間接的な礼拝も確かに存在していたと主張できる。

**【表 2】**

| 地名 | 史料名 | 内容 |
|---|---|---|
| ポーラ | *CIL*. XI, 3616 | 女神ローマとアウグストゥスの神殿 |
| テッラチーナ | *CIL*. X, 6305 | 女神ローマとアウグストゥスの神殿 |
| ファレリイ | *CIL*. XI, 3076<br>（＝ *ILS*. 116） | アウグストゥスとティベリウスのゲニウス、リウィアのユノーへの奉献 |
| ボノニア | *CIL*. XI, 804<br>（＝ *ILS*. 3218） | アポロとアウグストゥスのゲニウスへの奉献 |

| | | |
|---|---|---|
| フォルム・クラウディー | *CIL*. XI, 3303 | アウグストゥスの誕生日にアウグストゥスのヌーメンの祭壇で 2 頭の生贄を捧げること、アウグストゥスの誕生日とティベリウスの誕生日に祝宴を開くためにアウグストゥスのヌーメンの祭壇で彼らのゲニウスをブドウ酒と香で招くことを参事会決議 |

ポーラやテッラチーナでは、女神ローマとの合祀という形式でアウグストゥスのために神殿の建設がなされたことが確認される。女神ローマとの合祀は、前述したようにローマの伝統的宗教には存在しなかったが、ローマの支配下に入ったギリシア人都市で導入、普及されたものがこれらの地にもたらされたと考えられる。また、ファレリイやボノニアにおいてもアウグストゥスのゲニウス礼拝は確かに存在していた。

また、フォルム・クラウディーでは後 18 年にアウグストゥスのヌーメン礼拝が確認されている。ヌーメンとは、ゲニウスと人を外部から見守る守護神とされているのに対し、境界線や木、泉などの内側に宿る力を意味し、神々の場合にはそれによって神が神となる神性を意味していた[35]。しかし、「アウグストゥスのヌーメン（Numen Augusti）」そのものの意味に関しては、アウグストゥスのゲニウスと同義であるとするもの[36]からアウグストゥスのヌーメンを礼拝することはアウグストゥスを神として直接的に礼拝することと同義であるとするもの[37]まであり、様々な解釈が存在する。しかしながら、本稿では、その様々な解釈の中でも D. Fishwick のものを支持したい。彼は、アウグストゥスのヌーメン礼拝をアウグストゥスのゲニウスとは異なる意味を持つ間接的な礼拝として、アウグストゥス自身を神とした直接的な礼拝を意味していなかったと主張する[38]。支持する理由としては、フォルム・クラウディーの碑文内でのアウグストゥスのヌーメンの祭壇でアウグストゥスとティベリウスのゲニウスを「招く」との記述[39]、そしてティベリウス自身が後 5 年または後 6

年にローマ市でアウグストゥスのヌーメン礼拝を行っていたこと[40]がそれぞれ挙げられる。このことから、本稿では「アウグストゥスのヌーメン」とはアウグストゥスに本来備わっている神聖な力であるとするのが適切でないかと考える。この神格が礼拝されることで、アウグストゥスのカリスマ性はさらに高まり、後5年または後6年に奉献したティベリウスにとってもまた後継者として自らのカリスマ性を高める結果となったのであろう。

また、碑文史料以外からもアウグストゥスへの間接的な礼拝は確認される。ポンペイの四ツ辻では皇帝のラレスやゲニウスが礼拝の対象であったことや、家庭内においてもアウグストゥスのゲニウス礼拝が確認されている[41]。ポンペイの私的な家の壁画には、献酒をしているゲニウスの絵と、その下に「元老院決議によって *ex s*(*enatus*) *c*(*onsulto*)」という言葉が刻まれており、これは明らかに前述した前30年の元老院決議を想起させるものであった。このことから、ポンペイにおいては皇帝を神として直接的に礼拝する慣習だけでなく、皇帝のゲニウスとラレスを礼拝する慣習もまた存在していたと考えることが出来るのである。

### 3-2. 神なるアウグストゥス礼拝

次に取り上げるのは死後に神格化され国家神に列せられるようになった皇帝、すなわち神なるアウグストゥスの礼拝である。この礼拝は、ローマで行われていた数多くの皇帝に対する宗教的儀礼のうち最も公式なものであった。彼らへの礼拝が帝国内の各地で行われていたことは、存命中の皇帝への礼拝と同様に碑文史料や文献史料より明らかとなり、そのための神殿や礼拝を司る祭司の存在が確認されている。さて、ここでもその礼拝の諸相について論じていくことにするが、ローマ市では皇帝側すなわち「上から」の導入がなされたのに対し、イタリア地方都市では神なるアウグス

トゥス礼拝もまた、存命中のアウグストゥスに対する礼拝と同様に地方都市側による「下から」の導入であった。

まずローマ市における神なるアウグストゥス礼拝について述べることとするが、そこでは、新しい神殿の建立や祭司職の創設についてその権限を保持していた元老院による決議に従って国家宗教の伝統に沿う形で行われた。アウグストゥスの死後、元老院は会議を開き、アウグストゥスの神格化を決定し、神殿の建立と神官の選出、その他アウグストゥス祭祀団の創設などを定めたが、これらの決定に関して見ていくと、まず、神格化された皇帝の神殿の建設は次代の皇帝やその一族によって多くの場合担われ、初代皇帝アウグストゥスの神殿の建設は第 2 代皇帝ティベリウスとリウィアによって引き受けられた[42]。また神官や祭祀団についてもその職に Divi の一族が就任することとなった[43]。このことから、ローマ市における神なるアウグストゥス礼拝は何よりも次代の皇帝またその一族の意向が強く反映されるものであったと考えられる。彼らにとって、この礼拝創設の意義は、アウグストゥスが自らを「神なる息子」と称したように本来の共和政の形式を守りながら皇帝の地位をその宗教的権威でもって正当化すること、そして確定した規則のなかった帝位継承を安定させることであった。

一方で、イタリア地方都市における神なるアウグストゥス礼拝を検討していきたい。イタリア地方都市ではティベリウスがノラに神殿を建てたことが文献史料より明らかとなっており[44]、この神殿に関しては皇帝側のイニシアティブによってなされたものであるが、それを除いて、この礼拝が皇帝側によって導入された証拠はないと考えられる。

では、そのような中でイタリア地方都市における神なるアウグストゥス礼拝はそもそも広がりを見せていたのか。実際に当該地域における神なるアウグストゥスの祭司または神官（sacerdos/ flamen Divi Augusti）の称号

が確認される碑文史料を網羅的に収集した結果、そのような碑文史料は全部で 24 件あり、その内で年代がおおよそ特定されているのはわずか 6 件であった[45]。またその中でも、注目したいのは例えば前述した M. Holconius Celer のように神なるアウグストゥスの神官が「現在神格化されている皇帝の生前時の祭司」を意味し、存命中の皇帝に仕えていた者を指すものもあれば、*CIL*. V, 5267 や *AE* 1975, 353 のように、その年代や礼拝対象から本当に神格化された皇帝に仕えていた者を指すものもあったと考えられることである[46]。このことからは、イタリア地方都市においてさらに多様な礼拝が展開していたことが考えられ、神なるアウグストゥスの祭司・神官職を一括りにして扱うことが困難だと結論付けられる。そして、さらにこのことからは本当に神格化された初代皇帝アウグストゥスに仕えていた神官はごくわずかであって、このことが地方都市における神なるアウグストゥス礼拝の無関心さを示すかどうかは不明であるものの、礼拝はほとんど広がっていなかったと推測できるのである。

## 4. おわりに

帝政期ローマにおける「皇帝礼拝」は、実際にまさに多種多様なものであった。帝国各地で創設された礼拝の中からイタリア地方都市における礼拝を特に取り上げたが、都市内においてもそれぞれ起源の異なる様々な礼拝の形式が存在していた。存命中の初代皇帝アウグストゥスに対する礼拝の形式だけでも、アウグストゥスのゲニウス、ヌーメンだけでなく、女神ローマと合祀されたもの、さらにはアウグストゥス自身を礼拝対象としたものなど様々であり、1 つの都市の中でも多様なアウグストゥスに対する礼拝が存在していた。また、神なるアウグストゥス礼拝においても画一的な礼拝の広がりは見られなかった。さらに、ローマ市における神なるアウグストゥス礼拝を含め、礼拝設立の主体に関しても、皇帝、都市参事会、

地方都市の有力家門など実に様々であり、また礼拝の持つ意義も一様ではなかった。イタリア地方都市における礼拝に関して言えば、各々の都市が自由に礼拝を創設することが出来、アウグストゥスはそれを黙認するのみで直接的に関与することはなかった。そのため、イタリア地方都市規模の「皇帝礼拝」は政治的宗教的な皇帝のイデオロギーを反映させるものではなかったと考えられる。地方都市の有力者たちは「皇帝礼拝」祭司職の保持によって都市内の政治的社会的優位を誇示することがその意義であった。

以上のことから、帝政期ローマにおける「皇帝礼拝」という単一の制度、帝国全体における統一的な礼拝組織などはなく、「皇帝礼拝」という制度そのものが存在していなかったことが明らかである。確かに、ローマ市において元老院決議によって行われた国家としての正式の皇帝の神格化、そしてそれに伴った神なるアウグストゥス礼拝はまさに「皇帝礼拝」と言えるだろう。しかしながら、これはローマ市で皇帝によって行われた国家レベルの儀式であって、広大な帝国内の地方都市などに住む殆どの住民の関与しないものであった。このローマ市における神なるアウグストゥス礼拝とは別に、前述したような帝国内の様々な礼拝設立の主体が各々行う皇帝への礼拝の形式が無数にあった。特に、都市や個人が行う礼拝については多くがそれぞれ自発的に行うものであって、礼拝の対象という点でも儀式の点でも千差万別であり、原則として帝国内のこれらの礼拝全てを拾うことは困難を極めるだろう。それぞれの地における「皇帝礼拝」は、ローマ市における公式なものも含めていずれも地域的な現象として認められるのである。もしかしたら、それよりも狭い範囲内での現象として認められるものもあるかもしれない。

以上のことから、「皇帝礼拝」という言葉を単一的に用いることは困難であって、前述したキリスト教迫害の原因の 1 つが「皇帝礼拝」拒否にあったとの見解も、今や否定されつつあるが、やはりあまりにも単純すぎる

ものであると考えることができるのである。「皇帝礼拝」は完全に帝国各地の地域的礼拝に統合されており、そもそも皇帝への礼拝を画一的に皇帝側が政策として押し付けることもなかった[47]。こうして「皇帝礼拝」は、この分析概念でもって帝国の政治や宗教政策に与える影響を単純に論じることは出来ず、実際は帝国内の各地域の一宗教に過ぎなかったのであってその姿は無数に認められるものであったと考えられるのである。

そのため、この「皇帝礼拝」概念はあまりにも多義的であって、定義することが困難なものである。また、従来のような「皇帝礼拝」概念の単一的な使用は非常に誤解を招きやすいものであって、以上の点から「皇帝礼拝」という分析概念としての学術的有効性はないように思われる。しかしながら、この言葉に関しては便宜的に用いる場面がしばしば現れるのも事実であり、その場合には “Imperial Cult” や “Emperor Worship” ではなく “the Worship of Emperors” であることをことわる必要がある。日本語でこれを端的に表すことは困難であるものの、用いる際は多種多様な礼拝であることを明確にしておくことで誤解を避けることが望ましい。「皇帝礼拝」を論じる際には、それぞれの礼拝について、その背景や起源、社会的意義などを個別的かつ具体的に検討しなければならないのである。

## 注

1）「皇帝礼拝」とキリスト教徒迫害の関係に関しては、Millar, F., “The Imperial Cult and the Persecutions”, *Le culte des souverains dans l’Empire romain*, edited by W. den Boer, Vandoeuvres, 1972, pp. 145−175.; 弓削達『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』日本基督教団出版局、1984 年などを参照されたい。

2） Bickerman, E., “Consecratio”, *Le culte des souverains dans l’Empire romain*, edited by W. den Boer, Vandoeuvres, 1972, p. 27.

3） Taylor, L. R., *The Divinity of the Roman Emperor*, Middletown, 1931, p. 58.

4） *ibid*., pp. 14−17.; Crawford, K., The Foundation of the Roman Imperial Cult, St.

Olaf College Press, p. 2.; 島田誠「皇帝礼拝と解放奴隷」『岩波講座世界歴史 5　帝国と支配―古代の遺産』岩波書店、1998 年、246–250 頁。

5） Fishwick, D., *The Imperial Cult in the Latin West: Studies in the Ruler Cult of the Western Provinces of the Roman Empire*, Vol. 1–1, Leiden: E. J. Brill, 1987, pp. 53–54.

6） Taylor, *op. cit*., pp. 58–76.

7） Cassius Dio, 43, 14, 6; 43, 21, 2; 43, 42, 3; 43, 45, 3.

8） Cassius Dio, 44, 4–6.

9） Plutarchos, *Caesar*, 67, 8.

10） Cicero, *Philppicae*, 2, 110.

11） Appian., *Bellum Civile*, 2, 616.; Cassius Dio, 47, 18–19.

12） Cassius Dio, 51, 19, 7.

13） Gradel, I., *Emperor Worship and Roman Religion*, Oxford, 2002, pp. 36–37.; 島田前掲論文、258 頁。

14） Taylor, *op. cit*., pp. 181–182.; Cassius Dio, 54, 27, 2–3.

15） *ibid*., p. 185.; Cassius Dio, 55, 8, 6–7. なお、アウグストゥスのラレス礼拝についてはその導入などをめぐって様々な議論がなされている。詳しくは Niebling, G., “Laribus Augustis Magistri Primi. Der Beginn des Compitalkultes der Lares und des Genius Augusti”, *Historia: Zeitschrift für Alte Geschichte*, Bd. 5, H. 3, 1956, pp. 306–309.; Flower, H. I., *The Dancing Lares and the Serpant in the Garden: Religion at the Roman street at the corner*, Princeton, 2017. を参照されたい。

16） Cassius Dio, 56, 46.

17） Cassius Dio, 51, 20, 6–8.

18） 女神ローマは、ローマの伝統的宗教には存在しないローマ市を表す新しい神格であったが、ギリシア人都市スミュルナでの神殿建立（前 195 年）を契機として、時にローマの将軍（マケドニア軍を前 191 年のキュノスケファライの戦いで破った Titus Flamininus など）や総督と合祀され、ローマの影響下に入ったギリシア人都市に普及することになった。詳しくは、Mellor, R., “The Goddess Roma“, *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt*, Ⅱ–17, 2, 1981, pp. 950–1030.

19） Taylor, L. R., “The Worship of Augustus in Italy during His Lifetime”, *Transactions and Proceedings of the American Philological Association*, Vol. 51, 1920, pp. 128–133.; Idem., *op. cit*., 1931, pp. 205–223.

20） Gradel, I., “Mamia’s Dedication: Emperor and Genius, The Imperial Cult in Italy and the Genius Coloniae in Pompeii”, *Analecta Romana Instituti Danici*, Vol. 20, 1992, p. 55.; Idem., *op. cit*., 2002, pp. 73−108.

21） 本稿で扱った都市以外にアウグストゥス時代において皇帝自身に対する礼拝を行った可能性のある都市は以下の通りである。プラエネステ : *CIL*. XIV, 2974, 2964; フォルミナエ : *CIL*. X, 6140; クマエ : *CIL*. I, 1; *CIL*. X, 8375; スルモー : *CIL*. IX, 3098; ウェイイ : *CIL*. XI, 3782; ネーペット : *CIL*. XI, 3200; ファレリイ : *CIL*. XI, 3083, 3135; パグス・ステッラティヌス : *CIL*. XI, 3040; コサ : *CIL*. XI, 2631; ヴェローナ : *CIL*. V, 3257; アクイレイア : *CIL*. V, 852.

22） Taylor（*op. cit*., 1931, p. 215.）や Gradel（*op. cit*., 2002, pp. 81−82.）もまたこのネアポリスの礼拝に関してはアウグストゥスへの直接的な礼拝であるとの見方をしている。

23） *CIL*. X, 1797.

24） ミハイル・ロストフツェフ『ローマ帝国社会経済史』坂口明訳、東洋経済新報社、2001 年（Michael Rostovzeff, *The social and economic history of the Roman Empire*, Oxford, 1957）、37 頁。

25） Rufus と Celer の関係については、この他に、P. Castrèn による兄弟とする説と A. E. Cooley による 2 人は無関係とする説がある。詳しくは、Franklin, Jr., J. L., *Pompeis Difficile est: Studies in the Political Life of Imperial Pompei*, Ann Arbor, 2001, p. 20.; Cooley, A. E., “Politics at Pompeii”, *The Classical Review* 53−2, 2003, pp. 419−421.

26） *CIL*. X, 945（＝*ILS*. 6362a）.

27） *CIL*. IV, 7995. ウァレンスが祭司職を保持していたのは後 50 年から後 54 年の間のことであるとされているにも関わらず、残存状況などの徴候はさらに遅い年代、後 68 年を示唆していると考えられている。Mouritsen, H. and Gradel, I., “Nero in Pompeian Politics Ediсta Munerum and Imperial Flaminates in Late Pompeii”, *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik*, Bd. 87, 1991, p. 149.

28） *CIL*. IV, 1180.

29） I. Gradel は、アウグストゥスの神官または祭司職が初代皇帝アウグストゥスの死後においても長くイタリアで見られること、全ての皇帝が「アウグストゥス」の名あるいは称号を持っていたことから、これらの祭司は存命中の皇帝に捧げられた祭司を意味しなければならないと主張する。Gradel, *op. cit*., 2002, p. 86.

30） D’Arms, J. H., “Pompeii and Rome in the Augustan Age and Beyond: The Emi-

nence of the Gens Holconia", *In Studia Pompeiana et Classica in Honor of Wilhelmina F. Jashemski*, ed. R. I. Curtis, Vol. 1, New Rochelle, 1988, pp. 56–57.; Franklin, *op. cit*., pp. 17–18.; Mouritsen, H., *ELECTIONS, MAGISTRATES AND MUNICIPAL ÉLITES: Studies in Pompeian Epigraphy*, Rome, 1988, p. 90.

31） Suetonius, *divi Augusti*, 46: "Ac necubi aut honestorum deficeret copia…, equestrem militiam petentis etiam ex commendatione publica cuiusque oppidi ordinabat, …"

32） D'Arms, *op. cit*., p. 59.

33） ペルシアの戦いとは、M. Antonius の弟であり、この年のコンスルであった L. Antonius がオクタウィアヌスと対立し、M. Antonius の妻 Fulvia とペルシアに立てこもったものである。結果は、オクタウィアヌスの勝利に終わるが、Cassius Dio はその後、彼が捕虜とした 300 名の騎士と元老院議員を殺害したと伝え、さらにはペルシアの住民とそこで捕虜とされたその他の人々も殺害されたこと、ペルシア自体が神々の神殿を除いて完全に燃やされたことを伝えている。Cassius Dio, 48, 14; Suetonius, *divi Augusti*, 13–15.

34） 戦い直後のペルシアでは、さらにオクタウィアヌスが退役兵を入植させるために住民から土地を取り上げたことが推測されている。Ward-Perkins, B., *The fall of Rome: and the end of civilization*, Oxford, 2005, p. 158.

35） Fishwick, D., "Genius and Numen", *Harvard Theological Review*, Vol. 62, 1969, p. 361.; 島田前掲論文、259 頁。

36） Taylor, *op. cit*., 1931, p. 220.; Idem., "Tiberius'Ovatio and Ara Numinis Augusti", *The American Journal of Philology*, Vol. 58, 1937, p. 189.; Fowler, W. W., *Roman Ideas of Deity in the Last Century before the Christian Era: Lectures delivered in Oxford for the Common University Fund*, Mamillan, 1914, pp. 132–133.; Pippidi, D. M., "Le 'Numen Augusti'", *Revue des Études Latines*, Vol. 9, 1931, pp. 83–112.

37） Gradel, *op. cit*., 2002, p. 239–245.

38） Fishwick, *op. cit*., 1969, pp. 358–364.; Idem., "Numina Augustorum", *The Classical Quarterly*, Vol. 20, No. 1, 1970, pp. 191–197.; Idem., "Numen Augustum", *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik*, Bd. 160, 2007, p. 248–255.

39） *CIL*. XI, 3303:「そして、アウグストゥスとティベリウス・カエサルの誕生日に、参事会が食事をする前に、アウグストゥスのヌーメンの祭壇で祝宴を開くために、彼らのゲニウスがぶどう酒と香で招かれるべきである。(“Et ut natalibus Augusti et Ti(beri) Caesarum, prius quam ad vescendum decriones irent, thure et vino genii eorum ad epulandum ara numinis Augusti invitaren-

tur.”）」

40） *CIL*. I. 230

41） Taylor, *op. cit*., 1931, p. 152, p. 186.

42） Tacitus, *Annales*, 1, 11.; Cassius Dio, 56, 46, 3.

43） 初代皇帝アウグストゥスの死後、アウグスターレスの神官に任命されたのはゲルマニクスであり、彼の死後にその神官職はユリウス氏族に属する者が継ぐべきであると元老院決議されている（Tacitus, *Annales*, 2, 83.; Cassius Dio, 56, 46, 1.）。また、定員 21 人のアウグストゥス祭祀団に関しても、最も高貴な市民たちから選ばれた者の他に、ティベリウス、ドルーススゲルマニクス、クラウディウスがその一員となった（Tacitus, *Historiae*, 2, 95）。

44） Tacitus, *Annales*, 4, 57.; Cassius Dio, 56, 46, 3.

45） Flamen Divi Augusti et Romae: *CIL*. V, 3936（ウェローナ、後 167 年〜後 230 年）

Flamen Romae et Divi Augusti: *CIL*. X, 131（ポテンティア、後 3 世紀）; *CIL*. X, 5393（アクィヌム、後 23 年〜後 30 年）

Flamen Divi Augusti: *CIL*. V, 4386（ブリクシア、年代不明）; *CIL*. V, 5266（コムム、後 98 年以降）; *CIL*. V, 5267（コムム、後 65 年頃）; *CIL*. V, 6797（エポレディア、後 117 年以降）; *CIL*. V, 7605（アルバ・ポンペイア、後 1 世紀後半）; *CIL*. IX, 3384（アウフィヌム、後 2 世紀）; *CIL*. IX, 3385（アウフィヌム、年代不明）; *CIL*. IX, 5375（フィルムム・ピケヌム、後 1 世紀）; *CIL*. X, 1262（ノラ、後 14 年〜後 40 年）; *CIL*. X, 1806（プテオリ、年代不明）; *CIL*. X, 4641（カレス、後 1 世紀後半）; *CIL*. XIV, 2922（プラエネステ、後 180 年〜後 192 年）; *CIL*. XIV, 2972（プラエネステ、後 243 年）; *CIL*. XIV, 3014（プラエネステ、後 2 世紀後半〜4 世紀）; *AE* 1961, 109（コルフィニウム、後 2 世紀後半）; *AE* 1975, 349（アエセルニア、後 2 世紀〜後 3 世紀前半）

Flamen Divi Augusti et Divi Iuli et Divi Claudi; *AE* 1975, 353（フィルムム・ピケヌム、後 69 年〜後 79 年）

Flamen Divi Augusti perpetuus; *CIL*. V, 7007（アウグスタ・タウリノールム、後 79 年以降）

Sacerdos Divi Augusti; *CIL*. V, 4442（ブリクシア、年代不明）; *CIL*. X, 945, 946（ポンペイ、後 14 年以降）

46） *CIL*. V, 5267 については神なるアウグストゥスの神官職を保持している L. Calpurnius Fabatus がネロの治世に存在していたことから（Tacitus, *Annales*,

16, 8)、ここでの礼拝対象は神格化されたクラウディウス帝のことを指すのではないかと考える。また、*AE* 1975, 353 での礼拝対象は神なるアウグストゥス、神なるユリウスそして神なるクラウディウスであった。

47） Millar, *op. cit*. においてもまたキリスト教迫害の中で、皇帝礼拝の問題が占める位置は極めて小さく、神々礼拝全体の中で稀に皇帝礼拝が言及されたのにとどまっていることを指摘する。

# “Emperor Worship/ Imperial Cult” in Imperial Rome: Reassessment of “Emperor Worship/ Imperial Cult” Concept

OKAWA, Honami

Religious rituals to the Roman Emperors in Imperial Rome has been generally called “Emperor Worship/ Imperial Cult”, which is known to have various forms of worship. In previous studies of Roman history, this word has often used uniformly for all instances within the empire where religious rituals were dedicated to emperors and hasn’t used as a concept that has a clear content with academic definition. However, we assume that the actual worship of emperors in Imperial Rome had numberless variety. Therefore, we cannot simply discuss the effect of such worship on imperial politics and religious policies.

For that reason, this paper takes different levels of worship of the living and dead First Emperor, Augustus in Italy outside Rome, which is confirmed in inscriptions and literature. The aim of this paper is to discuss the diversity of worship of emperors in Imperial Rome by examining their origins and rituals, and to finally reassess “Emperor Worship/ Imperial Cult” concept.

The results of the reassessment are as follows: There was not a single system of “Emperor Worship/ Imperial Cult” and a unified worship organization in the empire. Thus, there was no “Emperor Worship/ Imperial Cult” itself. The worship of emperors in Italy varied in the object of its worship. And the cult of the emperors, including the cult of the deified emperors in Rome, was established by various initiatives such as an emperor, local city council（decuriones）, the social élites of the community. In latter cases, they worshipped this or that emperor according to its own discretion and ritual.

Thus, “Emperor Worship/ Imperial Cult” concept is too ambiguous and difficult to define. The conventional use of this concept is very misleading. Therefore, “Emperor Worship/ Imperial Cult” is not a valid analytical concept. When we discuss the worship of emperors in the study of Roman history, we cannot lump all worships together and discuss about them. So, we need to

consider the background, origin and social significance of each worship individually and concretely.

（令和元年度史学専攻　博士前期課程修了）